第２章　こどもの読書活動の現状

１　第７０回学校読書調査※(全国学校図書館協議会)

「第７０回学校読書調査」(令和７年６月の調査)によると、５月の１か月の平均読書冊数は、小学生１２．１冊、中学生３．９冊、高校生１．４冊となっており、前回調査より減少しています。また、１か月間に本を１冊も読まなかったと回答したこどもの割合（不読率）は、小学生９．６％、中学生２４．２％、高校生５５．７％となっており、前回調査より上昇しています。（図１・２参照）

平成３０年度以降の平均読書冊数の推移の傾向としては、年度により増減しますが全体的には横ばいである一方、不読率は上昇傾向にあります。

近年の要因の一つとして、第７０回学校読書調査の報告では、「タブレット端末が児童生徒に貸与され、学校である程度自由に操作をできるようになったことで、読書に時間を割けなくなったこと」を挙げています[1]。

こどもたちは日常的にＩＣＴ機器を使い、インターネットやデジタル技術を活用して学習しています。調布市でも、令和３年から、市立小学校に通う児童にはタブレット、市立中学校に通う生徒にはポータブルパソコンを貸与しています。その中で、こどもたちが求める知識や情報を自ら見つけられるよう、信頼性のある情報源を掲載したパスファインダー※の発行などの取組を進めていく必要があります。

また、発達段階に応じた読書支援を引き続き行い、乳幼児期の読書習慣の形成だけでなく、不読率が上昇傾向にある中学生・高校生になっても、継続して読書を楽しむことができる支援を充実させる必要があります。

図１　平均読書冊数の推移

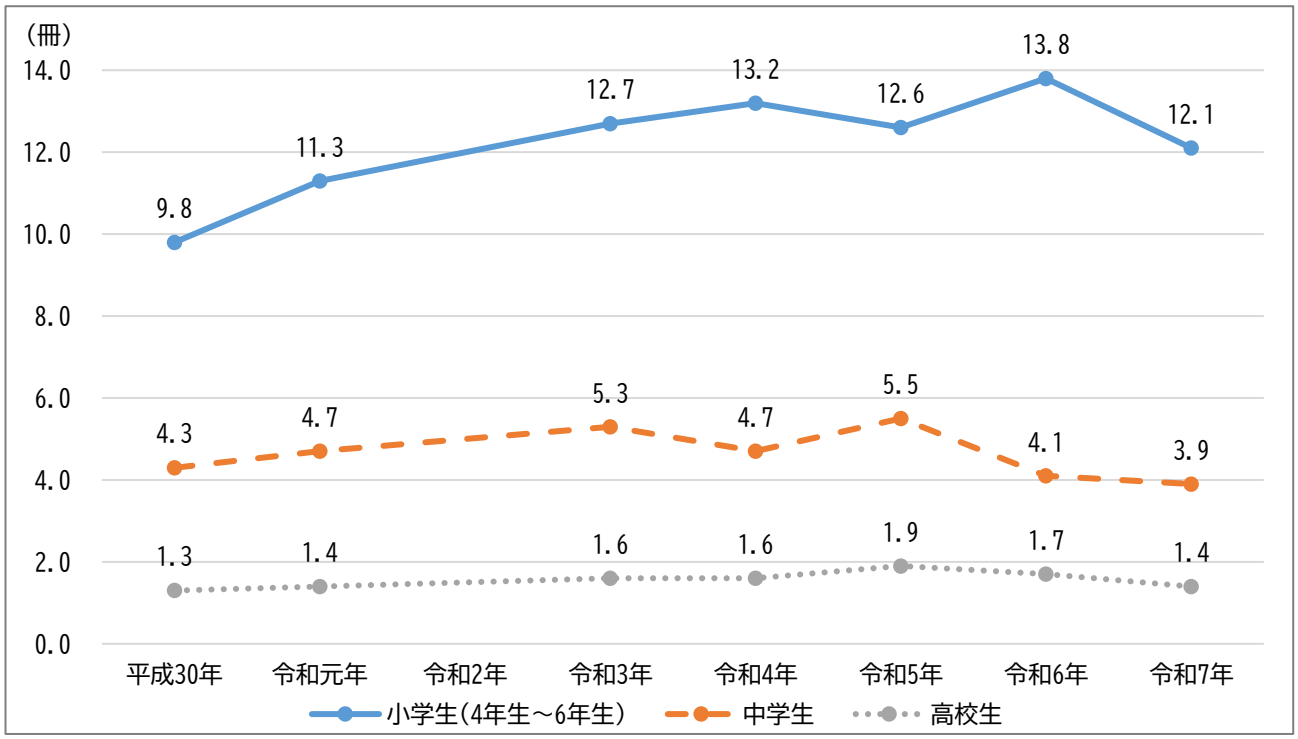
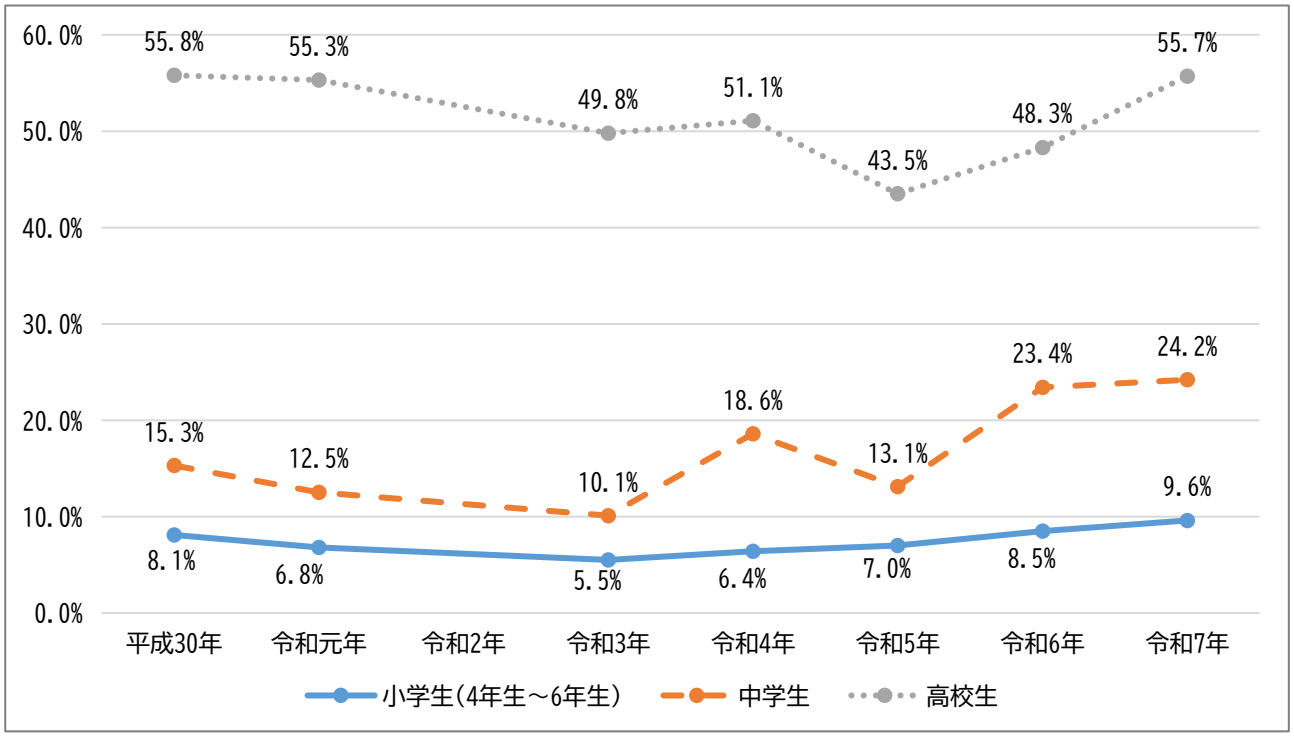


図２　不読率の推移



＜「学校読書調査※」（平成 30 年から令和 7 年（令和 2 年は未実施））の数値を基に作成＞

[1] 小日向輝代. 特集, 子どもの読書の現状（第 70 回学校読書調査報告）：読書でみんなの心に種をまこう , 5 月 1 か月間に本を何冊読んだか. 学校図書館. 2025, (901), p.17-21.

2　児童及び生徒の読書の状況に関する調査※(東京都教育委員会)

「児童及び生徒の読書の状況に関する調査」(令和６年度)によると、児童生徒の不読率（１か月の間に「本（電子書籍を含む。教科書、学習参考書、漫画、雑誌、図鑑、写真だけの写真集・絵だけの絵本、画集は含まない）」を１冊も読まなかった児童生徒の割合）は、どの学年においても上昇傾向にあります。（表１参照）「本」を読まなかった理由としては、「読みたい本がなかったから」（３９．９%）「本を読むことに興味がないから」（３９．４%）の回答が高い割合で推移しています。（図３参照）

また、「本」を読んでいる児童生徒と、読んでいない児童生徒の身近な環境の違いを比べると、「本」を読んでいる児童生徒は、身近な人と本を通じて交流している割合が高いことが分かります。（図４参照）

表１　児童生徒の不読率（%）

	令和元年度	令和４年度	令和６年度
小１	3.0	4.5	7.6
小３	3.8	4.6	7.4
小５	4.2	5.1	7.4
中２	9.9	10.3	11.6
高２	30.6	33.4	36.3

図３　「本」を読まなかった理由（%）【複数回答可】

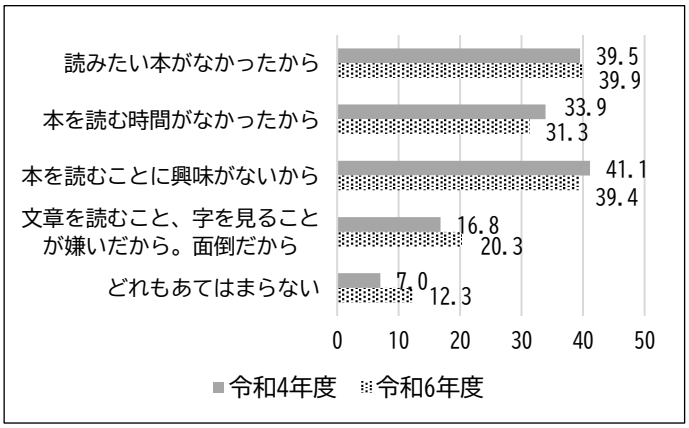
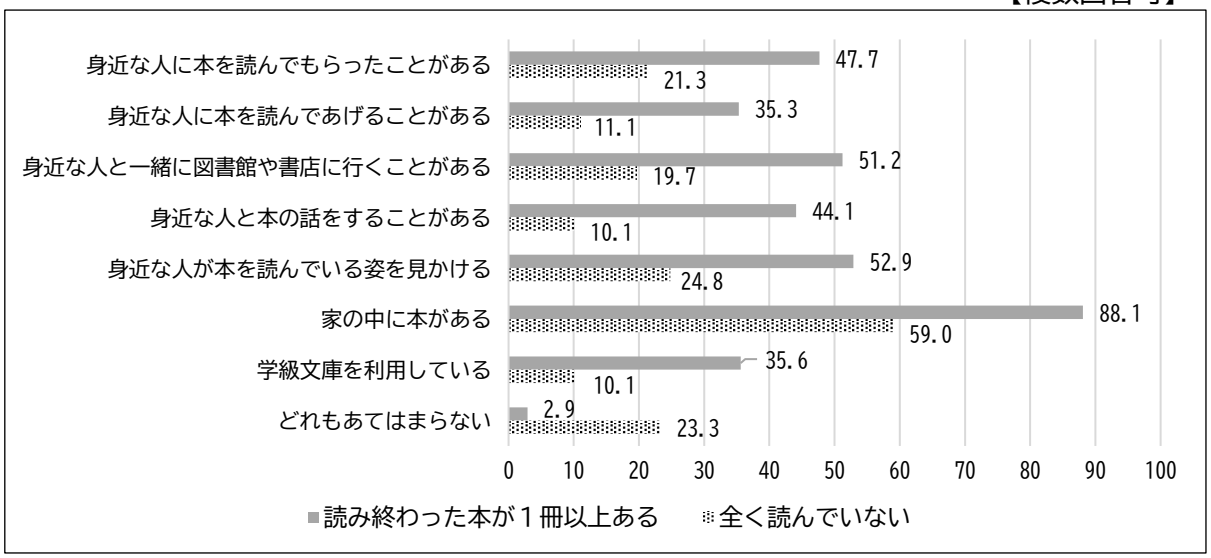


図４　「本」を読んでいる児童生徒と読んでいない児童生徒の身近な読書環境の違い（%）

【複数回答可】



＜『令和６年度子供読書活動推進に関する調査の集計結果』（東京都教育委員会）を基に作成＞

読んだ本の中に電子書籍があった児童生徒の割合は、令和４年度の調査と比べて、各学年でおよそ４％～６％上昇しており、小学生は主に家族や学校貸与の機器を用いて読んでいますが、中学生や高校生になると自分の機器で読むようになることが分かります。（表２・３参照）

表２　読んだ本の中に電子書籍があった児童生徒の割合（％）

	令和元年度	令和４年度	令和６年度
小１	10.1	13.5	17.7
小３	11.0	13.6	18.1
小５	14.9	18.3	22.9
中２	19.8	23.7	28.2
高２	25.6	27.6	33.7

表３　電子書籍は誰のパソコン等で読んだか（％）【複数回答可】

	家族	学校貸与	自分	その他
小１	42.3	25.6	27.1	14.4
小３	32.9	33.8	39.7	11.8
小５	32.0	34.9	50.4	5.7
中２	13.0	10.3	88.4	1.7
高２	8.8	7.3	89.4	1.7

＜『令和６年度子供読書活動推進に関する調査の集計結果』（東京都教育委員会）を基に作成＞

このことから、調布市においても、学校と連携しながら、デジタル機器を活用した読書案内や調べ学習支援等を行うとともに、児童生徒が身近な人と本の話をし、一緒に図書館や書店に行く等の体験ができる環境をつくっていくことが必要です。

３　子どもの読書活動についてのアンケート

第５次調布市こども読書活動推進計画の策定にあたり、令和７年度に、こどもたちの読書活動の現況及びニーズ等を把握するため、こどもと保護者を対象としたアンケート調査を実施しました。

調査概要及び回答結果の詳細等は、資料編４（P.６９）を参照してください。

ここでは、こどもの年代ごとに見られた調査結果の特徴や、年代を比較した際に見られた傾向について、まとめています。

(1)　本を読むことの好ききらいと読書活動の傾向（参照 P.１１７）

年齢が上がるにつれ、本を読むことがきらいな人が増えていきます。小学校高学年頃から、読書が好きな子ときらいな子とで分かれ、読書に対する意識が固定されていくようです。

また、中学生・高校生になると、読書自体は好きだが本を読まない、という人が増えていきます。

(2)　学校図書館や児童館等の日常的な活動場所における環境整備の重要性（参照 P.１１９）

小学生は、学校で本を読むことが多く、回答者のうち６０％以上のこどもが、

学校図書館を利用しています。一方で、中学生・高校生になると、学校図書館の利用者は、１５％程度に減っています。

また、小学校中学年までは、児童館・学童や放課後子供教室事業「あそビバ」※で本を読むこどもが多いということも分かりました。施設内に、低学年～中学年向けの本を充実させるなど、読書環境を整備する取組に効果があると考えられます。

(3)　対象の年代に応じた広報・ＰＲの重要性（参照Ｐ.１２１）

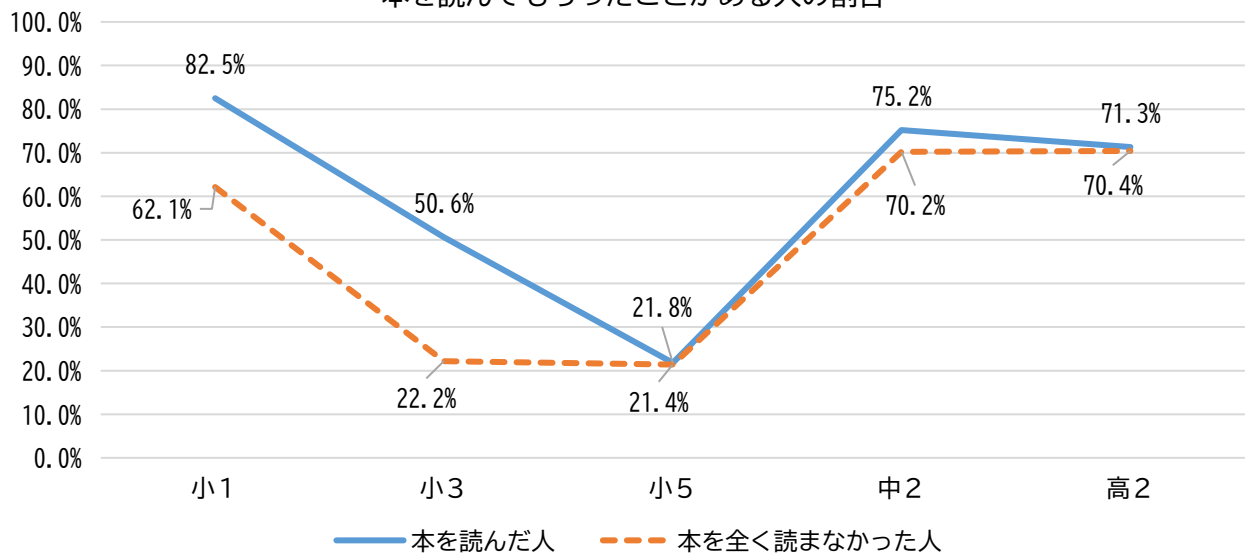
乳幼児の保護者及び中学生・高校生は、主に各種ＳＮＳ・インターネットから本の情報を得ています。一方で、小学生は、主に学校図書館や身近な人から本の情報を得ているということが分かりました。

また、乳幼児の保護者の半数以上は、市立図書館の紹介（展示やおすすめの本のリストを含む）により、本の情報を得ています。

(4)　読書習慣に対する読み聞かせ経験の影響（参照Ｐ.１２２）

小学校中学年までは、読み聞かせをしてもらった経験が、現在読書をしているかに影響していると考えられます。（図５参照）

図５　(幼いころから今までの間に)身近な人に
本を読んでもらったことがある人の割合



(5)　身近な人との本を通したコミュニケーションや読書に結びつく活動・環境の重要性（参照Ｐ.１２３）

小学生においては、「身近な人が本を読んでいる姿を見かける」・「家の中に本がある」と答えた人の割合は、本を読む人の方が高く、全く読まなかった人とは大きな差がありました。また、「身近な人と本の話をすることがある」・「身近な人（親しい友達や家族）と一緒に、図書館や書店に行くことがある」と答えた人の割合についても、すべての年代において、本を読む人の方が高く、読まない人とは差がみられました。

こどもが本を読むには、ただ身近に本があるだけではなく、本を通してコミュニケーションができる人の存在が重要だと考えられます。特に小学生にとって

は、家庭における読書に結びつく活動や環境が、読書習慣に大きく影響していると考えられます。

(6)　電子図書について（参照 P.１２６）

年齢が上がるにつれて、電子図書を読む人の割合は増えていきますが、「電子図書が読める・借りられる」ことが図書館にとって大事だと思う人の割合は、どの年代も６％未満にとどまっています。

どの年代においても電子図書を利用している人がいる一方で、図書館が電子図書を導入することについて、こどもたちからのニーズは低いことが分かりました。

(7)　図書館における居場所機能について（参照 P.１２７）

年代や本を読んでいるか・いないかに関係なく、「行く場所・居場所がないとき」や「なにかのついでに・ひまなとき」に図書館へ来館しており、図書館は、こどもたちの居場所として活用されていることが分かりました。

また、図書館に大事だと思うものとして、「勉強できるスペースがある」を選択した人の割合は、年齢が上がるにつれて高くなっていきます。特に高校生は、本を読んでいるか・いないかに関係なく、回答者の５０％以上の人が勉強できるスペースを求めており、本を全く読まなかった人の方が、読んだ人よりも数値が高くなっています。「落ち着いて本が読める」ことも、年代や本を読んでいるか・いないかに関係なく求められています。本を全く読まなかった人にも、読書や勉強ができる居場所として図書館が求められており、特に、勉強ができるスペースであることについては、中学生・高校生のニーズが高いことが分かりました。

(8)　調べものに対する情報収集手段の使い分け（参照 P.１３２）

年代が上がるにつれて、宿題や課題の調べものでは、本にあたる割合が高くなっていきます。特に高校生は、本を読んでいるか・いないかに関係なく、半数以上の人が宿題や課題で本にあたっています。（図６参照）

一方で、「生活の中で調べたいことや困りごとがあるとき」は、年代や本を読んでいるか・いないかに関係なく、来館理由としては低い割合になっていました。（図７参照）

こどもたちは、何を調べるかによって、本とそれ以外の媒体を使い分けており、宿題や課題について調べるときは本を使い、生活の中で生じた知りたいことや困りごとを調べるときは、本以外の媒体（スマートフォン等）を使っていると考えられます。

図６「宿題や課題で調べたいことや困りごとがあるとき」に
図書館に来る人の割合

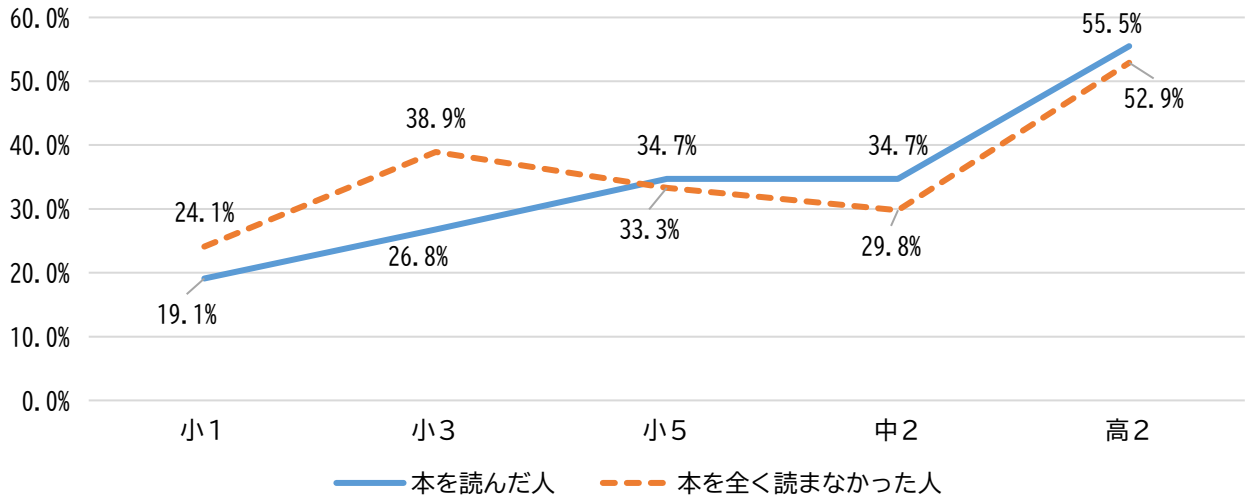
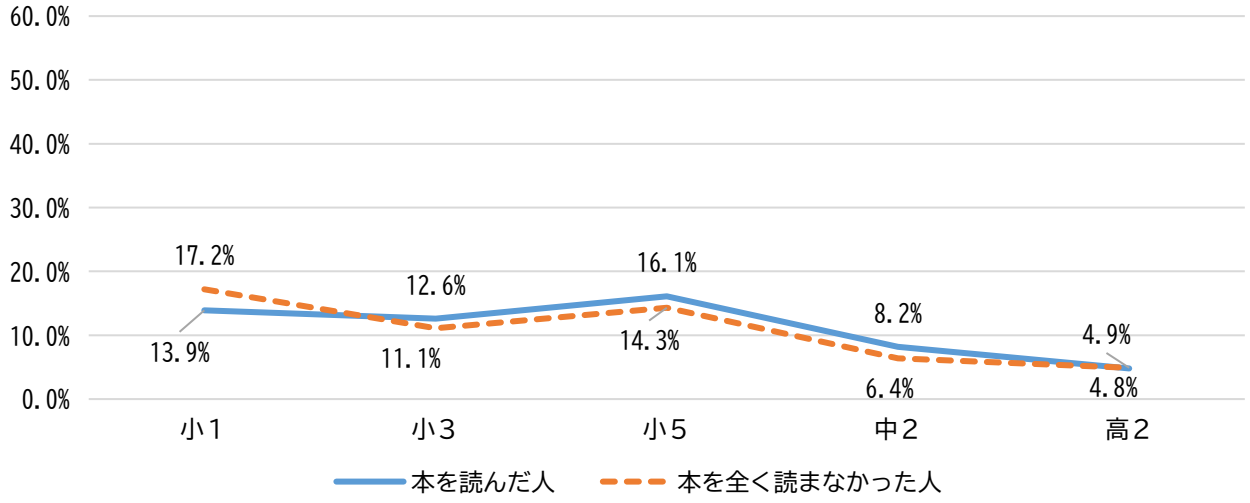


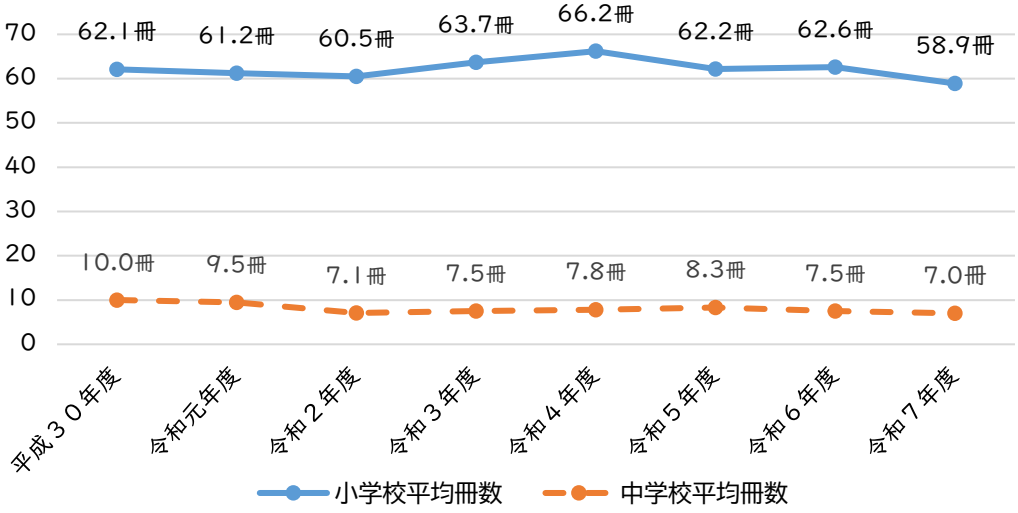
図７「生活の中で調べたいことや困りごとがあるとき」に
図書館に来る人の割合



4　調布市における学校図書館及び市立図書館の利用状況

「令和７年度版　調布市立学校図書館状況報告書※」によると、令和７年度の小・中学校図書館の年間貸出冊数は、小学生は１人あたりの平均が５８．９冊、中学生は７．０冊でした。冊数の推移は概ね横ばい傾向ですが、過去８年間では、最も少ない冊数となりました。（図８参照）

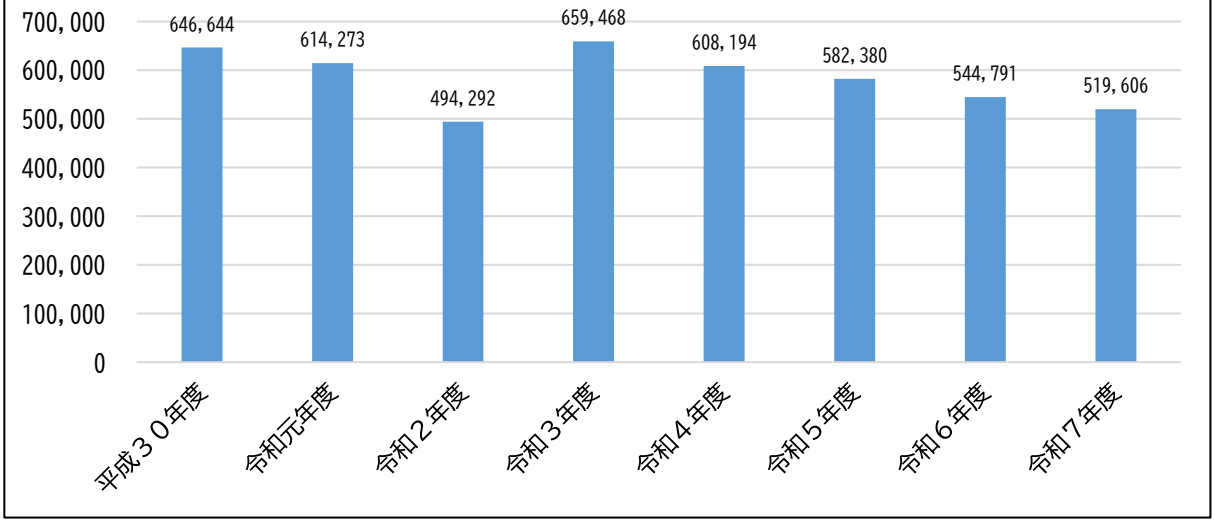
図８（学校図書館）児童生徒１人の平均利用冊数



＜『調布市立学校図書館状況報告書』（調布市教育委員会）の数値を基に作成＞

市立図書館の児童資料の年間貸出冊数は、令和７年度は、５１９，６０６冊でした。令和４年度から減少傾向が続いており、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、休館や利用制限等を行った令和２年度の数値に近づいています。（図９参照）

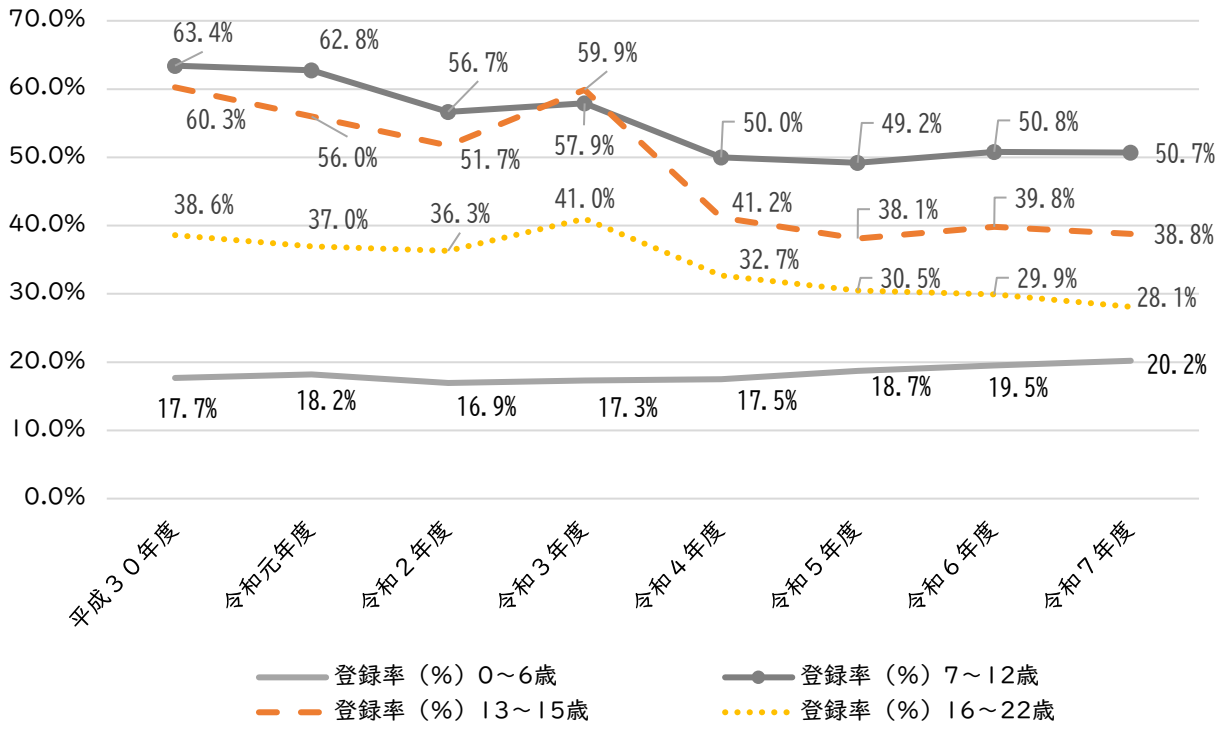
図９（市立図書館）児童資料年間貸出冊数（冊）



＜『数字で見る図書館活動』※（調布市立図書館）の数値を基に作成＞

また、市内在住者の利用登録率については、令和４年度以降は、概ね横ばい傾向で推移しています。７～１２歳、１３～１５歳、１６～２２歳の登録率は、新型コロナウイルス感染拡大前と比較すると低くなっており、特に１３～１５歳は減少幅が大きく、中学生世代の利用者が少なくなっています。（図１０参照）

図１０（市立図書館）市内在住者の利用登録率



＜『数字で見る図書館活動』※（調布市立図書館）の数値を基に作成＞

学校図書館及び市立図書館は、こどもの生活に根ざした身近な施設として、生活様式や学習環境の変化を捉え、ニーズに応じた読書活動の支援やサービスを提供することが求められます。また、すべてのこどもが発達段階や興味に応じて読書を楽しめるよう、本に親しむ機会や場をつくるなど、図書館の利用を促進する必要があります。

さらに、当事者であるこどもの視点に立ち、意見を取り入れながら、読書活動を推進していくことが重要です。